

11月の死者の月、今年も、私たちの高円寺教会の伝統に従って、祭壇の近くに皆様から寄せられた御意向によって、大切な方々のお名前を掲げ、心を合わせて死者の月のミサをおささげしています。

カトリック教会に受け継がれて来た信仰によって私たちがささげる全てのミサは、私たちの救い主イエス・キリストの死と復活を記念する信仰の祭りです。ミサにおいて主イエス・キリストの死と復活を記念するということは、このミサに参加している私たちが、聖書に記されているイエスの十字架の死とその復活という、言わば、過去の出来事を思い起こして、その記念を行っているということに過ぎないではありません。私たちがカトリック信者として教会から受け継いだ信仰によれば、十字架の死を越えて復活された主イエス・キリストは、この世の生のありさまを越えて、全てのものの創造主、全てのいのちの源である父なる神のみもとに行かれた神の子であるお方です。そして、その復活の主イエス・キリストは、この世の生の中にとどまるイエスを信じる者たちに「私は世の終わりまであなたがたとともにいる。」と約束してくださった教会の主であるイエス・キリストです。私たちは洗礼を受けてカトリック信者となることによって、二千年の歴史を越えてこのようなイエス・キリストへの信仰を宣べ伝えて来た教会の中に迎え入れていただいたのです。

私たちがカトリック信者となることによって、その懐の中に迎え入れられた教会において、私たちは十字架の死を越えて復活されたイエス・キリストと出会わせていただいたのです。その教会において、私たちが信じている私たちの主イエス・キリストは、世の終わりまで私たちとともにいてくださり、このミサにおいて、この世の生を生きる私たちをご自分の十字架の死と復活のいのちの神秘へと呼び集めていてくださるのです。私たちはミサに与るたびに、聖書に記されている私たちの救い主イエス・キリストが、私たちのために成し遂げてくださった、この世のいのちから永遠のいのちへの過ぎ越しの神秘に与っているのです。このような信仰がなければ、聖書に記されているイエス・キリストの十字架の死と復活という出来事は、私たちの生とは関わりを持たない、単なる物語の中の主人公の死と再生の物語に終わってしまいます。

今日の福音は、イエスが語られた天の国のたとえ話の中の十人の乙女たちの物語です。今日の福音も、イエスが語られたほかのたとえ話と同じように、それを聴く私たちの受け止め方に委ねられた、豊かな内容を持ったイエスのみこ

とばです。けれども、私たちが今年の年間主日ごとに耳を傾けてきたマタイ福音書においては、今日の福音の十人のおとめのたとえ話は、この世の終末を語る一連のイエスのおことばの中に響いています。今年の年間主日の終わりに当たって、私たちは私たちのこの世の生の終末を語るイエスのおことばに耳を傾けているのです。それにあわせるように、教会はこの十一月を死者の月とし、今日のミサで私たちはこの世の生を終えた、私たちにとって大切な方々のためにこの追悼のミサをおささげしています。十一月の死者の月の年間第三十二主日のミサの中であらためて耳を傾けた、十人の乙女たちのたとえ話は、私たちがこの世の生の中で受け止めた私たちの信仰が私たちに示している永遠のいのちの世界へと、私たちの心に向けさせるのです。

今日聴いた十人の乙女たちの物語の中で、私たちに不審な思いを起こさせるのは、何故、予備の油まで用意していた乙女たちが、油の切れてしまった乙女たちに分けてあげようとしなかったのかということです。それにもまして、油を買って戻って来た乙女たちに対して、婚宴の家の主人は、何故あのような無情な言葉をもって彼女たちを婚宴の席から締め出してしまったのかということです。イエスは、このたとえ話をもって、私たちにどのようなことを警告しておられるのでしょうか。

私たちがカトリック信者となることによって、私たちのうちに灯された信仰の灯火は、もしそれがこの世の生を生きる私たちの中で消えてしまうようなことがあれば、そのことによって、私たちが信仰のうちに見出したはずのことは全て闇に覆われて消えてしまいますのです。私が信じたはずのイエスがともにいてくださる信仰の世界は、私にとって意味のない世界になってしまうのです。私自身が、信仰の光の世界のありがたさを本当に受け止めていない限り、誰も私に代わってその光の世界を生きることは出来ないのです。私たちにあって信仰とはそのようなものです。私の人生を私以外の誰かが代わって生きることが出来ないように、私の信仰も、私自身がそれを生きていないなら、私にとっては無意味なものとなってしまいますのです。それとともに、私が見出したはずの信仰の世界は私にとっては意味のないものとなってしまいますのです。そのようなことにならないようにと、私たちに信仰の光の恵みを与え、そのいのちの世界へと私たちを招き入れてくださった、私たちが信じるイエス・キリストは、今日のみことばによって私たちを諭しておられるのです。私たちとともにいてくださるイエスは、この世の生を生きる私たちが信仰のともし火を消すことなく生きることの困難さを知っていてくださるからです。

私たちがこの世の生の中で、信仰のともし火を消すことなくカトリック信者として生きることが出来るためには、信仰の光の世界のすばらしさを私たちがこの世の生の中で味わうことが必要です。カトリック信者である私たちにとつ

てミサはそのためにあるのです。

最初にも言いましたように、私たちはこのミサにおいて、私たちがその一員となったカトリック教会が伝えてきた信仰によって、私たちのために十字架につけられて死んだイエス、しかし死者の中から復活されたイエス・キリストの記念の祭りを祝い、今もそのようにして、このミサの中に私たちとともにいてくださる復活のイエス・キリストとともにこのミサをささげているのです。このミサにおいて私たちは、私たちが信じる神の子、私たちの救い主イエス・キリストが私たちのために十字架つけられ、そうすることによって私たちに与えてくださった復活のいのちをこの身にいただいているのです。

私たちはこの世の生を生きる中で、カトリック教会に伝えられてきたこのような信仰を受け入れることによって、その信仰を生きる者たちとされたのです。そしてその信仰は、私たちのこの世の生の中では、私たちのうちに灯された灯火の光のようです。その信仰の光の中で、私たちは私たちのこの世の生が、復活のイエスが私たちを招いてくださる、全てのいのちの源である父なる神のもとでの永遠のいのちに繋がるものであることを知ったのです。

私たちのこの世の生は、皆等しく死をもって終わります。けれども、私たちの中に灯された信仰の光は、そのようにして終わる私たちの生が、イエス・キリストの復活のいのちに結ばれることによって、私たちのいのちの源である父なる神の永遠のいのちを目指すものであうことを照らし出しているのです。

私たちのミサの中に今日もともにいてくださるイエス・キリストは十字架の死を越えて復活され、永遠のいのちそのものである父なる神のみもとにおられるイエス・キリストです。そのイエスは、今やその永遠のいのちの中に迎え入れられた全ての死者たちとともに、このミサにおいて私たちとともにいてくださるのです。このミサにおいて私たちは、今やイエス・キリストとともに、父なる神の永遠のいのちの喜びの宴の中に招き入れられた人々とともに、言い尽くせない感謝のうちに感謝の祭りとしてのこのミサを捧げているのです。

私たちが受け入れた信仰の世界を照らし出す私たちの信仰の灯火が、この世の生の歩みの中で消えてしまうことのないように、今や、その信仰を生き抜いて、神のみもとでの永遠のいのちの喜びに迎え入れられた方々のことを想って、その取次ぎを願って、このミサをささげたいと思います。

カトリック高円寺教会  
主任司祭 吉池好高